

ブレーメンの町楽隊

DIE BREMER

STADTMUSIKANTEN

グリム兄弟 Bruder Grimm

楠山正雄訳

主人もちのろばがありました。
もうなが年、こんきよく、おもたい

袋をせなかにのせて、粉ひき所^{じょ}へかよっていました。さて、年をとって、だんだんからだがいうことをきかなくなり、さすがにこのうえ追いつかうのがむりだとわかると、主人は、ここらでろばのかいぶちをやめたものか、と考えだしました。ところで、ろばは、さっそくに、こりゃ、ろくなことではないとさ^にとって、逃げだして、ブレーメ

ンの町をめぐって、とことこ出かけました。そこへ行ったら、町の
がくたい
楽隊にやとってもらえようという
むなざんよう
胸算用でした。

しばらくあるうちに、おうらい往来に一
びき、りょう犬が、だるそうにころ
がって、口ばかりあけて、はっは、
はっは、あえいでいるのに出あ
いました。それはさんざん野山を
かけあるいて、へとへとになって

いるというようすでした。

「おい、すたこら大将、なにをあ
つぷ、あつぷいっている。」と、ろ
ばは声をかけました。

「いやはや、きいてくれ、こういう
わけだ。」と、犬はいいました。

「なにしろ年はとる、いくじがなく
なる、おいらもむかしのげんきで

りょうば
獵場をかけあるくわけにはいか
ない。主人は、それならいっそ、

たたき殺してしまえということになった。あわてて逃げだしたというわけだが、さて、この先どうしてパンにありつくか、じつはかんがえているところだよ。」

「ところで話だが、おいら、これからブレーメンの町へ出かけて、町の楽隊にやとってもらおうとおもうんだ、どうだ、おめえ、いっしょに行って、いちばん、音楽で

めしをくう気はないか。おいらリ
ュウトをひくから、おめえ、カンカ
ラ太鼓^{だ い こ}をたたくがしい。」

りょう犬は、うん、よかろうという
ので、いっしょに出かけました。

それからあまり行かないうちに、
ねこが一ぴき、往来にすわりこ
んだまま、それこそ三日も雨をく
ったような顔をしていました。

「やあ、どうしたい、床屋^{とこや}の親方、

どうやらおひげの手入どころではないという顔つきだが。」と、ろばはいいました。

「いのちとかえがけというところだ。けいきのいい顔をしてもらえまい。なにしろ年をとって来てね、歯はばくばくになる、ねずみのやつをおいまわすよりか、ろばたで^こ香^ば箱^こつくって、ごろにゃん、ごろにゃん、のどをならしていた

くなるさ。そこで、主人のかみさんが、いっそ水にはめておしまいよといいだした。そうされないうちに、とびだしては来たが、さていい^{し あ ん}思案はないしさ、いったいどこへどう行ったものかと、あぐねているのだよ。」と、ねこはいいました。

「おれたちとなかまで、ブレーメンの町へ行けよ。おまえさんは、

夜の音楽ならお手のものだろう、町の楽隊につかってもらえるぜ。」と、ろばはいいました。

ねこは、さっそくさんせいして、いっしょに出かけました。

やがて、三人組の脱走者^{だっそうしゃ}は、とある屋敷内^{やしき}に来かかりました。門の上に、その家のおんどりがのっけていて、ありったけの声をふりしぼって、さけび立てていまし

た。

「おい、骨のしんまで、じいんとく
るような声を出すなあ。どうかし
たのかい。」

と、ろばはいいいました。

「なあに、あしたはいいお天気で
すよって、知らせてやっていると
ころだよ。」と、おんどりはいいいま
した。

「なにしろ、けっこうなお^{せいぼ}聖母さま

の日だ、おちいさいキリストさま
の下着の、おせんたくして、ほし
なすった日だ。ところが、そのあ
したのにちようび日曜日に、お客があると
いうんで、ここのおかみさんが、
なさけ知らずにもほどがあらあ、
女中の話だがね、それで、あす
はおいらをスープにしてたべっ
ちまうってんでね、こん晩、さっ
そく、首をチョン切れといいつか

ったとよ。だから、せめて声のだ
せるうちとおもって、おいら、のど
のやぶれるほどわめき立ててい
るんだよ。」

「やれやれ、なんということだい、
赤ずきん、おれたちといっしょに
行くがいいよ。ブレーメンの町へ
出かけるところだ。ころされて死
ぬくらいなら、すこしは気のきい
た所が、どこへ行ったってあろう

じゃないか。おめえはいい声しているから、なかまになって音楽をながしてあるけ、いっぱしかせげるぞ。」と、ろばはいいました。

この申し出は、しごくおんどの気に入りました。そこで、こんどは四人つれだって出かけることになりました。

二

ところで、ブレーメンまでは、なかなか一日では行けません。そのうち日がくれたので、森の中へは行って、そこでひとばんあかすことにしました。

まず、ろばと犬とは、一本の木の下にごろりと横になりました。

ねことおんどりとは、木の枝の上
にやすみました。ところで、おん
どりはわざわざこずえの先まで
行ってとまりましたが、これが、い
ちばんの安全な場所であったの
です。さてねようとするまえ、この
おんどりはもういちど、東西南北、
風のふく方角がどこかとながめ
まわしたとき、ふと、むこうに、ち
らちら火らしいものがみえたので、

なかまに声をかけて、どうしても、
そうとおくなくないところに家があっ
て、あかりがついているらしいと
いって知らせました。

ろばが、そこで、
「じゃあおれたち、ここをひきはら
って、もっと先まで行ってみよう
や。どうもこの宿は上等じょうとうとはいか
ないから。」と、いいますと、犬も
そこへ行ったら、骨の一、二本、

ことによると肉の香^{かおり}ぐらいかげよ
うかとおもって、さっそくさんせい
しました。

こういしだいで、四人組は、
そのあかりのさしている方角^{ほうがく}に
むかって、出かけました。するう
ち、あかりはずんずんはっきりし
てきて、ぱあっとてりだしたとおも
うと、そこはどろぼうの家で、中
にはこうこうと灯^ひがともっていまし

た。

ろばは、なかまでいちばんの
せいたかのっぼなので、窓のと
ころまで行って、中をのぞいて
みました。

「親方、なにかあったかね。」と、
おんどりはたずねました。

「どうして、あったかどころのさわ
ぎじゃないぞ。」と、ろばはこたえ
ました。「ちゃんとテーブルごしら

えがしてあって、けっこうなごち
そうと、のみものが、山とならん
でいるよ。どろぼうども、てんで
に、はちきれそうな顔で、よろしく
やってるところさ。」

「そいつをものにしようじゃない
か。」と、おんどりはいいました。

「うん、うん、どうしたってわりこま
なきゃあな。」と、ろばはいいまし
た。

そこで、まず、どろぼうどもを追っぱらうには、どうすればいいかと、四人組の動物は、相談そうだんをはじめましたが、やがていいくふうがみつかりました。

ろばは、前足を窓にのせることになりました。犬は、ろばのせなかにとびあがることにしました。ねこは犬のせなかによじのぼることにしました。おしまい、お

んどりが、ばさばさととびあがって、ねこの頭の上のにのっかりました。いよいよしたくができあがると、一、二、三のあいずで、四にん組はいっせいに、音楽をやりだしました。ろばはひひんとわめきました。犬はわんわんほえたえました。ねこはにゃおんとなきました。おんどりはこけこっこうと、ときをつくりました。とたんに、ま

どをつきやぶって、^{いちどう}一同へやの中へとびこみました、がらん、がらん、がらん、音をたててガラスはこわれました。

どろぼうどもは、びっくりぎょうてん、きゃあとさけび声をあげてとびあがりしました。たいへんな

^{かいぶつ}怪物がとびこんで来た、そうとよりしか考えません。もうすっかりおびえきって、てんでに、あたま

をかかえて、そとの森の中へ、にげだして行きました。

そこで、四人組は、ゆうゆうテーブルにつきました。ごちそうは、のこりものでも、がまんすることにして、それでも、これからあと四週間ぐらい^{だんじき}断食してもいいといういきおいで、つめこめるだけ、たらふくつめこみました。

三

さて、四人組の楽隊なかまは、おなかができると、あかりをけして、めいめいのうまれつきとすきずきにまかせて、いいぐあいの

ねどこ
寝床をさがして休みました。ろばはそとのつみごえの上にねました。犬は戸のかげにねました。ねこはへっついの上で、灰のぬ

くみをさがしてねました。おんどりは、とまり木のかわりに、屋根うらのはりの上にのりました。なにしろ、みんな遠道をして来て、くたびれていましたから、もうさっそくに、ぐっすりねつきました。

真夜中をすぎたときに、どろぼうどもが、とおくからみますと、うちの中にはあかりがともってはず、中はひっそりかんと、しずまりか

えっているようでした。

「どうもおれたち、おどかさされて、
にげだしたといわれちゃあ、がま
んできないぞ。」

おかしらはこういって、ひとり
^{てした}
手下にいいつけて、ようすをみ
せにやりました。

さて、いいつかった手下がは
いってみると、家の中はどこもひ
っそりしていました。そこであかり

をつけてみようとおもって、台所へ行きました。すると、やみに光っているねこの目だまを炭火とま^{すみび}ちがえて、いきなりマッチをつっこみしました。ところが、ねこのほうは、おやすいご用とうけてはくれず、ううう、とたけりながら、顔にとびついて、めったらやたらに引っかきました。

いやはや、おどろいたのなん

の、手下のどろぼうは、したたかにやられて、びっくり、はいもう、うらの戸口から逃げだそうとしますと、そこにねていた犬が、とびあがって、むこうずねにかみつきました。そこで、庭へかけだして、つみごえのそばをかけぬけようとしみますと、ろばがあと足でしたたかに、けとばしました。すると、このさわぎで目をさまさせられた

めんどりが、はりの上から、はし
やぎきって、ひと声、キケリッキー、
とどなりました。

どろぼうは、いのちからがら、
足にまかせてにげだして、おか
しらの所へかえりました。そうして
こういいました。

「どうもはや、たいへん、あの家
には、すごい魔物まものがはいりこん
でいて、いきなり、きみわるく、ふい

うう、と息をふっかけて、ながい指で顔をひっかきました。それから、戸の前にはひとり、男が待ちぶせていて、小刀をすねにつきたてました。庭へ出ると、なんともえたいの知れない、まっ黒なばけものが立っていて、こんぼうをふって、したたかなぐりつけました。その上、たかい所には、
さいばんかん
ちゃんと裁判官がひかえていま

して、さあ、そのわるもの、ここへつれて来い、とどなりました。いやもう、さんざんのていたらくで、まっくらさんぼう逃げて来ました。」

それからは、どろぼうどもも、こりて、二どとふたたび、この家にはいろうとはしませんでした。ところで、ブレーメンの楽隊なかま四人組も、ひどく、ここが気に入

ったので、それなりもうよそへ出
て行こうとはしませんでした。

さて、これまで申したことは、つ
いこないだ、それこそ湯気^{ゆげ}の立
つほやほやの口からきいたお話
ですよ。